G.S.C.

学生が＋紹介する＋キャンパスライフ

GAKUTO
SENDAI
CONSORTIUM

2016.03
VOL.16

FUKKOU DAI GAKU

特集

復興大学

take free

ご自由にお持ち帰りください

こんにちは！フリーペーパーG.S.C.をお手に取ってくださりありがとうございます。フリーペーパーG.S.C.では、わたしたち学都仙台コンソーシアム広報サポートスタッフが取材した『学都仙台』の魅力を発信していきます。Vol.16では『復興大学』を特集します！

学都仙台とは??

Gakuto Sendai?

大学と市民・企業・行政が互恵的な関係を結び、ともに高めあい、相互に発展の機会を創造していく「知が連携する学都仙台」を目指します。

また、大学の知的資源が生かされる都市の個性を内外にアピールし、学都の持続的発展を可能とする更なる集積を呼ぶ「知の創造都市仙台」を目指します。

これまでの大学間の取り組みや大学等と市民、企業、行政等との連携による取り組みにより築いた実績をもとに、大学等の基本である人材育成機能の充実を中心とする共通課題への取り組みを強化しています。各大学が有する知的資源を活用し、各大学の充実・発展に有する活動を行うとともに、市民生活の質と向上と地域の発展、および「学都仙台」のブランド力向上を図ることを目的としています。

学都仙台の取り組みとして、復興大学、単位互換ネットワーク、サテライトキャンパス、フリーペーパーG.S.C.の発行などがあります。

復興大学について

About Fukkoudaigaku

復興大学は、東日本大震災直後、大学などの高等教育機関ができる復興支援の一環として、学都仙台コンソーシアムで実施案を立案し、平成23年より5ヵ年の文部科学省補助事業としてスタートしました。

復興大学では、人材育成・教育復興支援・被災企業支援・ボランティア支援の４事業を柱として、復興に寄与することを目指します。

①復興人材育成教育コース
②教育復興支援
③地域復興支援ワンストップサービス
④災害ボランティアステーション

復興大学は、今年度で文部科学省からの補助が終了しますが、平成28年度からは学都仙台コンソーシアムの一事業として、活動を継続しつつ、新たな形での「復興大学」がスタートします。

復興大学

関内 隆先生
（東北大学教授）
に
インタビュー

復興大学の先生に直撃！

Q1

まず復興大学という取り組みが一段落しての率直な感想を教えてください。

A1

率直に言って寂しいですね。今までの「復興大学」としての体制がなくなってしまうのは非常に残念。

Q2

関内先生も実際に講義をされていましたが、どのような思いで講義をされ、何を感じましたか。

A2

そもそも復興大学は東日本大震災が起こったことが取り組みの出発点です。そのため、かつて前例がないくらいの大規模な震災の悲惨さを、興味があって受講している若い世代にしっかり伝えなくてはならないという思いでした。しかし、実際には若い世代の間で震災への意識というものが年数の経過と共に薄れてきていると感じましたね。

Q3

実際に講義をされていた先生方の中に、東北の大学以外の先生方も多々いらっしゃいましたが、どのような経緯でお越しになったのでしょうか。また、先生方同士で何か共通の認識やコンセンサスなどはありましたでしょうか。

A3

私が担当する「復興の思想」は、学会仲間や以前東北大で教鞭をとっていた先生たちの力添えを頂いた形です。震災からの復興に関心を抱いていたため快く協力してくれました。他の科目については科目ごとに任せていました。復興大学のコーディネーターを務める先生同士では良く話し合いの場を設けたりしていました。

Q4

実は以前大学1年のころに先生の講義を履修していたことがあり、関内先生は歴史が専門だと思うのですが、この震災発生から震災復興への取り組みは自然災害の教訓として、後世においてどのような意味を持ってくるのか、或いはどんな役割を果たすとお考えでしょうか。

A4

取ってたんだね（笑）。そうですね、確かに歴史が専門ですが、これは少し難しい質問ですね。私個人としては、これまでの近代文明の見直しを迫られることになるのではないかと考えています。ある意味、この震災は歴史的にも大きな転換点になり得ると考えています。正直、原子力発電所一つとってみても、震災が起こるまでこれまで危険と隣り合わせなものだとは知りませんでしたしね。歴史を振り返り、過去にも起こった自然災害と当時の人たちがどのようにその後自然と向き合ってきたかをもう一度考え直してみることもいいと思います。話が大きくなりますが、根本的に人が地球とどう向き合うかや、人がどうやって自然や他の生物と共存していくかについてもう一度考え直す機会を提供しているようにも感じます。これまでの当たり前が今一度問い直されるべきかなとも思います。

Q5

では実際に履修した学生たちには今後どんなことを期待したいですか。

A5

正直年数の経過と共に学生の震災に対する意識が薄くなってきているのは残念ですが、もっと自分の身近な問題として捉えてほしいと思います。少しばかり、震災復興の解決策を性急に求めすぎな気もしますね。そう簡単に答えが見つかるものでもないし、こういう時こそ学生の皆さんの柔らかい頭で柔軟な発想をして、様々な解決策を模索してほしいとも思います。

Q6

復興大学での最後の取り組みとして、一般の方向けに公開講座を開かれるとお聞きしましたが、一般の方々にはどのようなことを伝えたいとお考えでしょうか。また、何を期待されますか。

A6

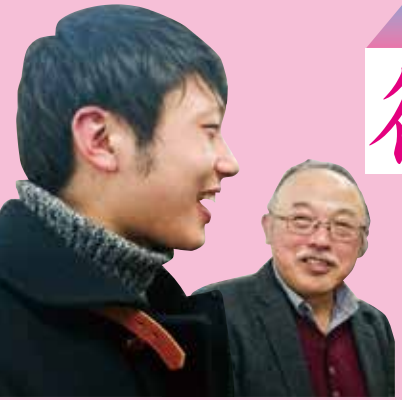
社会的な関心は実は学生より一般の方のほうが高いことが多いんですよね。実際にたくさんの方から公開講座への応募をいただいています。しかしこの公開講座は1回完結型なので、継続して話し合うといった取り組みをこちらとして用意することが正直なかなか難しいのが現状です。なので、一般の方々が主体的となって議論を継続してするような機会があるといいのかなと個人的に考えたりしています。また、事実と事実を結び付けていって、事実同士の構造化をはかることで物事を鳥瞰的に捉えるようなことも是非してほしいと思っています。

Q7

最後に、復興大学そのものは今年度で終了という形になりますが、関内先生の今後の「震災復興」というテーマでの展望などを教えてください。

A7

確かに「復興大学」としての取り組みそのものは終わってしまいますが、私個人としては今後もこのような取り組みを開講する講義を通して継続していきたいと思っています。東北大学の学生が1年時で履修する「基礎ゼミ」という少人数の講義で、実際に被災地に赴いたり、大学の基幹科目としても開講し、今後も学生に関心を持ってもらえるような取り組みを続けていくつもりです。



談笑する窪先生（右）と沖垣さん（左）

復興大学
復興人材育成 教育コース 第Ⅳ期生修了式に参加！

平成28年1月30日に行われた「復興大学復興人材育成教育コース第Ⅳ期生修了式」に参加しました！修了式では、復興人材育成教育コースのⅣ期生、修了生、講師、運営に関わった方々などが出席しました。

修了式では、窪俊一先生（東北大学准教授）と第Ⅲ期・第Ⅳ期受講生沖垣貴大さん（東北大学工学部2年）のお二人からお話を伺いました。

窪　俊一 先生　Syunichi Kubo

Q. 復興人材育成教育コースが設立されたきっかけは？

A. 2011年3月の東日本大震災を契機として、「復興を担う人材を養う」という目的のもと、企画が始まりました。文部科学省から、大学復興センター構想の一つとして承認された事業です。2012年の第Ⅰ期生を皮切りに、4年間を通じて取り組みが行われ、今年の第Ⅳ期が最後となります。

Q. 復興人材育成教育コースの特徴は？

A. カリキュラムには、座学だけではなく、ディスカッションや協働型の実習が盛り込まれています。特に、「現場を見る」ことを重視した内容が多いことが特徴としてあります。4年間同じカリキュラムで行うのではなく、復興のプロセスに応じて、カリキュラムの内容に変更が加えられてきました。

Q. 取り組みが始まってから4年、何か変化などはありましたか？

A. 第Ⅰ期の頃は、震災があってからすぐということもあり、震災と受講者自身との関わりが非常に強く、復興を考えるモチベーションが強かったです。第Ⅳ期では、震災に関する直接的な経験や記憶が薄れるなかで、「現場を見る」機会をできるだけ設けるようにしました。課外で被災地を訪れている学生もおり、そのサポートも行っています。

Q. 東北の学生にメッセージをお願いします。

A. ただ東北にいるだけでは分からないことがたくさんあります。震災から5年が経ち、震災を実感するような実物はなくなってきています。何もなかったかのように考えるのではなく、これからもできるだけ被災地に目を向けてほしいです。

沖垣　貴大 さん　Takahiro Okigaki

Q. 復興人材育成教育コースに参加したきっかけは？

A. もともと被災地の復興に関心があり、友人に勧められたことをきっかけに参加しました。

Q. 復興人材育成教育コースの良いところは何ですか？

A. 教授との距離が近いこと。課外で行っている活動にもアドバイスをもらっているし、教授の家にお邪魔させていただいたこともあります。専門分野も学年も違う他大学の学生と一緒に、復興に向かうための思索を深められます。

Q. コースを修了するにあたり、考えるようになったことは？

A. 被災地で生じている様々な問題についてです。以前から問題は内在していて、震災があったからこそ、元の問題が顕在化するようになったのだと思います。貧困面、農業面、漁業面などで生じている問題は、被災地ではない地域も抱えているものであり、ベースは一緒です。

Q. コースを修了し、今後の学びにつなげるとしたら？

A. 今後は、自分の専門を十分に勉強し、そこから被災地の復興にアプローチするつもりです。意思決定、都市システム、ビッグデータなどについて学びを深め、ソフト面からのサポートをしたいと考えています。

インタビューにお答えいただいたみなさん、ありがとうございました！

編集後記 vol.16

実際に取材をする等、活動できたことは良かったと思います。一方でスケジュール管理が甘い点は反省点として挙げられます。段取りが良ければ更によりよい質のものができたと思うので、今後に活かしていきたいです。

東北大学　木山　翼

今回は初めてG.S.C.の発行に携わりました。取材がとても楽しかったです。次号ではより良いものを作れるよう頑張ります。

東北大学　川村　昇

今回の発行に関して、あまり多くのことに関わることができませんでしたが、集事に完成してよかったです。学都仙台コンソーシアムに関われたことは自分の中で大きな経験になりました。スタッフとして参加することができてよかったです。

尚絅学院大学　菅原由樹

広報サポートスタッフ募集

学都仙台コンソーシアムの取り組みの１つである、フリーペーパー G.S.C. の発行スタッフを募集しています。一緒に学都仙台コンソーシアムを盛り上げてみませんか？他大学の学生と交流する中で、多くの気づきが得られます。少しでも興味のある方は、ぜひエントリーしてみてください。

学都仙台コンソーシアムについて詳しくは Web で！
http://www.gakuto-sendai.jp/

※このフリーペーパー「G.S.C.」は、加盟大学の学生で構成される「学都仙台コンソーシアム広報サポートスタッフ」が作成・発行しています。

学都仙台コンソーシアム

学都仙台コンソーシアム広報部会事務局
（東北大学教育・学生支援部教務課教育支援係）
TEL：022-795-3925
FAX：022-795-7555
E-mail：kyom-d@grp.tohoku.ac.jp